



以来、殆ど毎日広場へ通って凧揚げをしていた。そのうちに何人かの同好とも友たちらになったらしい。

「それはいいけど、三輪車を乗るのはそろそろおやめなよ。」

「大丈夫じゃ。ちょうど運動にもなるしな。」

「まだ転んだらどうするのよ。」

お爺さんは一ヶ月前に三輪車を乗って大門をくぐる時に敷居の上で一度転んだ。後頭部が直接地面に打って大出血になった。救急台の上で寝ているお爺さんの顔が一瞬頭をよぎった。不思議なことに今は傷跡一つ残っていない。

お爺さんは一瞬寂しそうな表情をして、またすぐ笑い出した。

「そっじゃな。これも我が孫のためか。ハハハハ。そっいえば、お前はまた日本に行くのかっ。」

「うん、今度も熊本。交換留学の時と同じところ。ほら、くまモンの写真、送ったでしょ。うっ。十月にまた熊本に行く予定だったけど、」  
「コロナでね。」

「そっか、お前も立派になったな、ハハハハハ。ところが外国は今「コロナ」というのが大変らしいが、日本は大丈夫か？」

「ま、まだ行っていないから分からないけど、気をつければ大丈夫だよ。」

お爺さんは軽くうなずいた。そして言った。

「頑張れよ。」

「うん、頑張る。」

お爺さんの家を出た時に、隣に住む人に声かけられた。名前は分からないけどどこか見覚えのある顔だ。

「おお、お爺さん見に来たのか？」

「はい、お爺さんはまだ凧を作っていますよ。」

「え？凧を作っている？だって……」

その人の聲は強風のように、私の脳裏に籠っていた霧を吹き飛ばした。お爺さんの家を振り返った。部屋の静けさがだんだん心に染み込んできた。朝の露が零すように、思わず涙を流した。